



崇高なミッション

佐渡総合教育センター所長 加藤 雄一郎

「もしあなたが、ワクチン接種担当大臣だったら、どのような接種方法を提案しますか。」順次配給されるワクチンを、どういう優先順位で接種し、接種会場はどうしますか。

さて、今の子どもたちが大人になり、社会の担い手となる頃、今以上に複雑で多様な価値観の中で、意思疎通や合意形成をしながら折り合いを付けて、新たな価値を見出すことがとても重要になっているでしょう。いろいろな考えが溢れ、何が正解か分からないからこそ、共感や尊重する態度を育てていきたい。多種多様な人と納得解や最適解を探る過程で、主体的・対話的で深い学びを教師自身が日頃から実践していきたいものです。何も授業のときの子供だけの話ではありません。

前例のない道でも他者と協働しながら価値の創造に挑み、よりよい社会を創り出していける人材の育成を私たちは担っています。そんな子どもたちを育てる私たちもまた、未来を見越し学び続けることによって、変化や多様性に的確に対応できる資質・能力を鍛えていかなければなりません。

ワクチン接種については、スマホを活用して効率よく接種できたのではと思っています。でもスマホがない人には…と考えながら、全世界で一日でも早いコロナ収束を願うばかりです。

そして、ICTの発展とともに、ICTとこれまでの方法との最適な融合を図る挑戦が始まっています。GIGAスクール構想の取組でも、それぞれのよさを活かし、目的と手段を混同することなく、学びの質的転換に対応していきましょう。

最後にもう一つ。冒頭の質問を子どもたちに投げ掛けたら、どう答えるだろうか。

プロジェクト支援訪問を通して

下越教育事務所 指導主事 平野 徹

今学期、八幡、内海府、畑野、加茂、小木の各小学校に伺い研究授業を参観させていただきました。

伺った5校の先生すべてに共通していたことがありました。それは、担任の先生がもれなく一人一人の子どもを大切にしていたということです。子どもの声に耳を傾け、受け止め、授業の中に生かす。学級の一人一人を大切に、聴き合う関係を作ろうとしているなど、子どもとの信頼関係をベースにした学級経営の上に授業が組み立てられていました。

また、どの学校でも子どもの「主体的」な姿を引き出すための教師の工夫について探究し、「協働的な学び」「深い学び」が実現できていたかどうかを子どもの姿から共に探っていました。新学習指導要領の趣旨の実現を目指した取組が進んでいることをひしひしと感じました。

一方で、課題も明らかになってきました。共通していたことを2点紹介します。1点目は、学びのゴール（授業のゴール、関わりの場面でのゴール等）の姿をもっと明確に想定する必要があるということです。子どもが何を基にして、どのように考え、関わり合いながら課題解決を目指すのか、学びの姿を想定することで、授業の手立てが明確になります。そのためには下越教育事務所発行「Teachers'2020」でも紹介している「逆引き設計」の授業づくりが参考になると思います。2点目は、学習評価を充実させるということです。教師の指導改善につながる評価はこれまでも重視されてきていましたが、学習の目標や評価規準を子どもと共有し、子どもが自らの学習を振り返る学習改善につながる評価も充実させる必要があること、評価計画を単元計画に位置付けることなどを課題として指摘させていただきました。これについても先の「Teachers'2021」やNITSの「オンライン講座」などが役立つと思います。

今後も訪問を通じて、協働的な学びの実現や学習評価の充実について皆さんと研修を深めたいと考えています。よろしくお願いいたします。

自立活動の充実には保護者との面談から

教育指導主事 庄山 佳代子

特別支援学校の学習指導要領「自立活動篇」小学部・中学部学習指導要領では、目標を「個々の児童又は生徒が自立を目指し、障害による学習上又は生活上の困難を主体的に改善・克服するために必要な知識、技能、態度及び習慣を養い、もって心身の調和的発達を基盤を培う」と定めています。特別支援学級においても自立活動を設定し、障害による学習上又は生活上の困難の改善・克服を目指すのです。

各校でも自立活動を計画的に設定・実施されていると思います。児童生徒の障害の実態を把握し、一人一人に合った自立活動を計画することは、簡単なことではありません。ここに特別支援教育の難しさがあるように思います。しかし、見方を変えると、ここにやりがいがあるとも言えるのではないのでしょうか。困難の改善・克服を児童生徒が主体的に取り組む姿が見られた時、教師と共に大きな喜びが共有できるのではないかと思います。

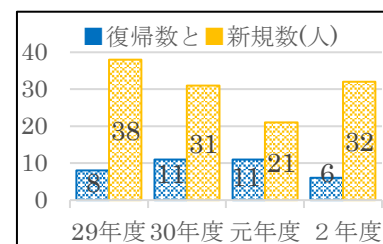
自立活動の内容は大きく6つあります。どの点に焦点を当てて困難の改善・克服を目指すか、どのような方法で主体的な態度を育成するか、一朝一夕には決められないでしょう。こんな時こそ、保護者との懇談がヒントになるように思います。児童生徒を真ん中に、保護者と担任・職員が懇談する中で、目指す方向や方法が見えてくると考えます。懇談を機会に自立活動の充実をぜひ図ってみてください。

不登校を生まない学校づくり

教育指導主事 名古屋 瑞穂

文科省の調査で昨年度の佐渡市の小中学校の不登校の児童生徒は、67名でした。令和元年度から2名増加しました。また、病気や家庭の事情による欠席が30日以上の子供生徒も19名おり、学校を休む児童・生徒の増加傾向には歯止めがかかっていません。全国的に見ても不登校の人数が増加しており、令和元年度は、前年度より2万人弱の増加になっています。令和2年度がどうなったかは、10月下旬頃の調査結果を見ないと分かりませんが、特効薬のような効果的なものがないのが現状です。そのような中で各学校が取り組みをすすめるとしたら何ができるのでしょうか。

不登校を増加させないためには、右のグラフからも分かるように、新規の不登校を出さない努力をすることが、大切です。



まず、学校に行きたくなるようないじめのない楽しい学校づくりをした上で、不適応の兆候が見えた場合、早めの対応をとりましょう。佐渡市では、適応指導教室を設置するとともに心の教室相談員や訪問指導員を配置しています。県のスクールカウンセラーと併用しながら、教育相談体制や支援体制を充実させて個に応じた決め細やかな対応をお願いします。不登校は、単に学校への登校という視点からだけでなく、社会的な自立を支援するという立場で取り組むことが大切です。

1人1台タブレット端末の活用開始

今年度始に整備された1人1台のタブレット端末の活用が各校で始まりました。はじめのうちは「クラスの子ども全員がログインするだけで1時間かかった」等、先生も子どもたちも戸惑いながらの利用だったようです。ところが、7月に入る頃には、先生が課題やワークシートを[Teams]で配付したり、子どもたち同士でパワーポイントで共同編集をしたりする等、端末を効果的に活用する姿が見られました。まずは積極的に利用して、1人1台端末に慣れてほしいと思います。

